
最果てを求めて

くる ひなた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最果てを求めて

【Nコード】

N0446W

【作者名】

くる ひなた

【あらすじ】

王城の中は秘密がいっぱい。二人の少年、シオンとスオウは、探検に出掛けることにした。

最果てを求めて1

金色の髪に深い青い瞳のその人は、女神のように美しいかんばせに慈しみの笑みを浮かべ、自分の前に並んで経つ幼い者達を交互に見やった。

「可愛い可愛い坊やたち。探究心と好奇心を抑えてはなりません。疑問に対して無邪気に対峙できる子供のうちに、たくさんのことを経験していらつしやい」

「はい、おばあさま」

「いつてきます、おばあさま」

彼女をキラキラとした眼差しで見上げるのは二人の少年。

白銀の髪に紫の瞳という稀な色彩を纏った方の少年は、名をシオンという。

もう一方、黒髪に深いブラウンの瞳の少年の名はスオウであり、

二人は共に八歳になる従兄弟同士。

麗しい金髪の女性はシオンの父方の祖母にあたり、シオンの母の兄の息子であるスオウとは血縁関係はないのだが、彼女は二人を同様に孫として愛してくれている。

そしてその人は、この大国の現皇帝の生母でもある。

息子である皇帝がいまだ未婚のため、誰も住まわぬ後宮の主として君臨する皇太后は、何部屋もある側妃のための部屋の一室に、可愛い孫の少年達を送り出した。

好奇心旺盛な年頃の彼らが、この広大な王城の探検に繰り出す足がかりとして。

「お邪魔しまーす」

そう言つて、無人と分かり切っている個室のドアを遠慮がちに開く従弟の後ろ姿に、シオンは呆れたような溜め息を吐いた。

「誰もいないって知ってるのに、なんでわざわざ言うんだよ」

「分かつても言わないと落ち着かない、律儀な国民性なの」

そう言うスオウは、実はことは異なる国の住人である。

いや、国というより、もはや世界そのものが違う。

そしてそれは、少年達の極々近い親類縁者にしか知らされていない事実でもある。

ただし、生まれた時から互いの世界が当たり前のように身近にあり、いまだ十にも満たない幼いシオンとスオウが、世間一般から見ても不可思議な状態にある身边に疑問を抱くのは、まだまだ先のことだろう。

住人のいない側妃の部屋は、しかしきちんと掃除が行き届いて、何時でも人が住まえる状態に保たれていた。

祖母の住まう皇太后の私室や、こちらはまだ空室の正妃の間ほどではないだろうが、立派な調度品を設えて洗練されたリビングも、その奥の扉の向こうにあつた寝室も広く、漂う香りさえどこか上品だ。

今は無人とはいえ、見知らぬ女性のための個室に長居するのは、物心つき始めた少年達にはどこか居心地が悪く、早く目的のものを見つけ出してここを出ようと、無言のままに頷き合つた。

「あるとしたら、リビングじゃなくて、奥の寝室じゃない？」

「だよな。廊下の入り口から更にワンクッションある方が、何かあつた時に時間稼げるもんな」

まず、寝室に足を踏み入れたシオンは、大窓に近付きカーテンを開いた。

明るくなつた室内を、後から入ってきたスオウもきよろきよろしながら歩き回る。

天蓋付きのベッドを覗き込み、壁に掛けられた大きな額をずらし

ては裏を検分し、更には二人掛かりで壁際の大棚を引きずり、その後ろにも何も無いことを確認して溜め息を吐いた。

「ないねえ。やっぱり、リビングの方にあるのかな？」

「ううん、ちょっと待てよ」

二人が一体何を探しているのかというと、皇太后曰くこの部屋のどこかにあるという、秘密の通路に通じる扉だった。

この後宮南棟において、奥から二番目の側妃のための個室には、いつぞやの皇帝の代に作られた秘密の抜け道があるのだそうだ。

その噂は、いまやある程度の位の宮廷人には知られているが、いま現在この部屋に住まわせねばならない方が存在しないので、塞がれることもなくそのままの状態にされているという話だ。

皇太后は二人の少年達にその存在を教え、まずは抜け穴を見付けてそれがどこに通じているかを確かめ、それを出発点に王城に他にも幾つも存在する隠し通路を探して冒険していらっしゃいと、告げたのだった。

王城は広大で、シオンとスオウが遊んで回するには充分すぎるほどの物件だが、現皇帝が未婚で世継ぎもまだな状況である現在、周りは忙しく働く大人達ばかりで、二人と同じ年頃の子供は他にはおらず、もちろん遊び相手になるような者もない。

本日は、所用で登城するシオンの父母に連れられて、彼らはやってきた。

遊びたい盛りの少年達が退屈しないよう、祖母は楽しい余興を提案してくれたのだろう。

寝室には抜け穴はないのかと首を傾げるスオウに対し、大人ぶって両腕を組んで眉間に皺を寄せたシオンは、その部屋の窓と入り口扉の位置に視線を巡らせた。

「あっちが外で、こっちがリビングだろ。リビングの向こうが廊下だから……人が通れるような穴を作れるとしたら、この両側の壁なんだよな」

シオンが難しい顔で見据えた壁際、一方には大きな額に飾られた絵画が、もう一方には大きく立派なクローゼットが備え付けられている。

「あの額の裏は俺が見たぞ。何にもなかった。クローゼットは、スオウ見た？」

「覗いたよ。ドレスしか入ってなかった」

「ほんとに？　ちゃんと見たか？　ドレス掻き分けて、奥の奥まで調べたのか？」

「え……」

シオンの容赦ない追求に、スオウはたじたと応えに窮し、ひどく自信無さげな顔をした。

「何だよ、中身全部引っ張り出して調べろっての」

「だめだよー、無理だよー。どうしても遠慮しちゃうもん」

他人の家の他人の洋服ダンスを厚かましく漁るなんて、慎ましい国民性を持ったスオウには些か気が引ける行為だったのだ。

そんな彼を尻目に、シオンは一切の躊躇無くクローゼットの扉を観音開きに開け放つ。

中にぎっしりと掛けられていた誰の物かも分からぬドレスを驚掴み、ポイポイと豪快にそれらを放り出した少年の前に現れたのは、当然空っぽになったクローゼットの突き当たりだ。

これといって目を引く特徴もない、サイドと同じ素材でできた真っ平らな壁。

しかし、「靴くらい脱ぎなよっ！」と、室内では靴を脱ぐ習慣の国に生きる従弟が背後で慌てるのを無視し、遠慮なく土足でクローゼットの中に乗り込んだシオンが奥を叩くと、ひどく軽い音がした。クローゼット自体は、部屋の壁にぴったりはり付く形で設置されている。だから、その背中が壁面と密着しているはずで、内側から叩けば部屋の壁にまで振動してもっと重い音がするはずだ。

つまり、どうやらクローゼットの向こう側には空洞があるようなのだ。

シオンとスオウはクローゼット自体をずらしてみようと、二人掛かりで横から懸命に押してみたが、びくともしない。

よくよく調べてみると、二人の腕力が足りなくて動かないのではなく、それ自体がビスで壁と床に固定されているようだ。

——ますます怪しい。

再びクローゼットの中に上がり込んだシオンは、奥の壁をじっと睨み据えた。

律儀に脱いだ靴を持って隣に並んだスオウも、一見なんの変哲も無い平面を注意深く探った。

「——あ……」

「あつ……！」

やがて、二人の少年の視線は、ある一点に吸い寄せられる。クローゼットの奥の隅。

僅かに姿を覗かせているそれは、薄暗い内部では余程注意しないと見落としてしまうだろう。

周りと同色同素材で作ることにより目くらましを狙ったらしい、小さな小さな門かんぬきだ。

よくよく目を凝らして見てみれば、それは四隅全部に設えられているではないか。

鍵をかけるというよりは、奥の板が動かぬようにサイドに固定するのが目的だったようで、少年達の指先だけでそれらは難なく外れた。

そして、

「うわっ、ニンジャ屋敷か、ここはっ」

錠を外した壁の片端を押すと、中心を縦軸にくるりと壁自体が回るカラクリになっていて、やはりその向こうには探していた抜け穴がぽっかりと口を開いていた。

「シオン憧れの回転扉じゃん。よかったね、忍者オタク」

「オタクって言うな。興味深いだけだ。——じゃ、行くぞ」

クローゼットに仕掛けられた隠し通路の内部は狭く、光が全く届

かず真っ暗だった。

シオンもスオウも灯りなど持って来なかったので、二人して手探りで壁をペタペタ確認しつつ、とにかく前に進む。

幸い途中に分かれ道もなく、間もなく彼らは突き当たりに到達したが、それもまたドアとしてあるわけではなく、やはり穴を隠すようにカモフラージュした板に塞がれているようだった。

しかし、入ってきた扉よりは立て付けが甘いのかその隙間からは微かに光が漏れ、衝立ての先が何処か別の場所に通じているのは間違いないさそうだ。

シオンとスオウは、幾らか暗闇に慣れた目で微かに見える互いの顔に向かって頷き、「せーの」とかけ声を合わせて同時に利き足を振り上げた。

ガコンツ——！！

出口の板は入り口のそのように回転するカラクリではなかったようで、幼い少年二人の蹴りによって難なく外れて吹き飛んだ。

途端に明るくなった視界に目を細めたシオンとスオウの耳に、続けて覚えのある声が聞こえてきた。

「——なんだ、一体……シオン？ スオウ？」

驚いたような声を上げて、二人の姿をみとめて駆け寄ってきたのは、彼らにとっても実に親しみある間柄の人物だ。

「あれ？ ルド兄がいるぞ」

「ってことは……ここは皇帝さまの部屋ってこと？」

見事な金髪と青い瞳の青年は、シオンの父の年の離れた弟である皇太后の末の息子である彼が、現在この国の皇帝陛下の地位に就いている。

多忙な身ながら、時間を見付けてはシオンやスオウと遊んでくれる、優しく気安い兄貴分だ。

「なるほどね、側妃の部屋から皇帝の部屋に秘密の抜け穴……。こ

れが作られた時代の正妃さまは、それはそれは怖かったんだな」

「かかあ天下ってこと？」

「だってさ、堂々と嫁にしてるはずの側妃に、こんなこそそした穴を通って会わなきゃいけないとか、相当だろ」

「うん、カワイソウだね」

秘密の抜け穴が通じていたのは、後宮における皇帝陛下の私室の一つだった。

シオンとスオウが蹴り開けたのは隠し扉ではなく、壁に掛けられていた大きな額に入れられた絵画だったようだ。

「お前達、一体どこから来たんだ？ 何なんだ、その穴は……」

そのすぐ脇に据えられていた大きなソファで仮眠をとっていたらしい現皇帝が、驚くのも無理はないだろう。

「ルド兄、いいこと教えてあげるよ。本妻にバレずに愛人とイチャつきたい時は、南棟の奥から二番目の部屋に相手を住まわせるといよ」

「はあ？」

「あ、穴は狭いから、ルド兄が通る時は頭打たないように気をつけてね」

「おい……」

何のことだか分からないという顔をしている皇帝を放置し、壁穴から床に降り立った二人だったが、そこでふと片方の少年が難しい顔をして腕を組み、うつむと唸って考え込んでしまった。

「どうしたの？ シオン」

「うん……なんか、引つ掛かるんだけど。側妃の隠し扉に比べて、こっちの出入り口の隠し方が粗くない？ なんで、こっちもクローゼットに通じるように扉を作らなかつたんだろ？」

「ああ、なるほど」

確かに、壁に掛かった絵画の裏に穴というのは王道過ぎて、他人に見つかるリスクは高いはずだ。

こちらの部屋にも、立派なクローゼットが備え付けられている。

それなのに、そこを隠し扉に利用しなかったのは何故か。

「……あやしい」

「ルド兄、ちよつと失礼」

ピンときたらしい二人の少年は、いまだ現状が飲み込めていない皇帝を放つて、クローゼットに駆け寄った。

先ほどの側妃の部屋の物よりも、更に大きく豪華なそれを開くと、中には普段着・儀礼用を含めた様々な皇帝の衣装が掛かっていたが、シオンとスオウは遠慮なくそれを掻き分け頭を突っ込み、中に上がり込んで奥まで這って行った。

律儀な性格のはずのスオウも、今度は靴を脱ぐのを忘れてしまっていた。

「——あつた！」

「やつぱり……」

かくして、先ほどの側妃のクローゼットで見たのと同じ仕掛けが、この皇帝陛下の私室のクローゼットにもなされていた。

シオンとスオウが四隅の門を外すと、それはやはり回転扉になっていて、その向こうにはぽっかりと穴が開いている。

「おつ、おいっ！ お前達」

躊躇無く穴に潜り込んでいった甥っ子達に一瞬戸惑った皇帝陛下は、しかし意を決したように自らも自らのクローゼットに上がり込み、少年達の後を追ったのだった。

そして、その穴の通じていた先は……

「——って、別口？」

「気の多い皇帝さまだったんだねえ」

「……」

先ほどの側妃の部屋とはまた違う個室。

内装や調度品の雰囲気からして、明らかに女性が住まうことを想定して作られた——つまり、おそらくは別の側妃のための部屋と容易に想像できた。

秘密の抜け穴の出口は、今度は壁の絵画の裏などではなく、その

部屋備え付けのクローゼットの中だった。

「ご丁寧に、こちらは皇帝の部屋から穴を通って来ても扉が開くよう、両方向から操作出来る留め具が取り付けられていた。

「クローゼット同士を繋げて出入り口に手間をかけてる辺り、こっちの部屋が本命っぽくない」

「だな。ルド兄、本命の愛人は、こっちの部屋に囲うといいみたいだよ」

「……おまえたち」

弱冠八歳のあどけない少年達の口から飛び出す言葉に、齢二十七の初心な皇帝陛下はたじたとさせられ、絶句した口を片手で覆った。

そうして更に、シオンとスオウの子供らしく無垢で偏見のない、それでいて鋭く容赦ない興味は休む間もなく、吸い寄せられるようにある一点をロックオンした。

壁に、大きな絵画が一枚、よい具合の高さに堂々と掲げられている。

それに気付いた皇帝は「まさか」と思い、少年達は「もしかして」
と思って駆け寄った。

そして、二人掛かりで大きな額縁をずらしたそこには――

「うわー、あつたよ……」

「おもしろいところだねえ、後宮って」

デジャヴを感じさせられる、つい先ほど皇帝の私室で見たのと同じような穴が、ぽっかりと口を開いていたのだ。

「隠し通路だらけじゃないか……どうなってるんだ」

皇帝とはこの王城の主であり、当然今居る側妃の部屋を含めた後宮全体の主でもある。それなのに、今の今まで抜け穴を知らなかったらしい皇帝は、啞然と呟き見事な金髪に彩られた頭を抱えて込んでしまった。

そんな彼を尻目に、少年達はまたも躊躇なく新たに現れた穴に挑むつもりだ。

まだ十にも満たない彼らの身長ではいささか届かない壁の穴に、わざわざ椅子を引き摺ってきてよじ登った。

「おっ、おいこら、待て。どこへ続いているのかも分からないのに……」

慌てて駆け寄ってきた大人の声など聞く耳も持たない少年達は、暗闇など物ともせずにとんどん奥へと進んで行ってしまった。

年の割にしっかりしている少年達だが、可愛い甥っ子達に何かあったとは心配で、再び後を追おうかと壁の穴に手を掛けた皇帝だったが、背後からそれを止める声があった。

「陛下、こちらにいらっしやいましたか。そろそろ午後の会議の時間ですよ」

「——ジヨルト！」

そつと気配もなく、温和な笑みを浮かべて彼の背後に立っていたのは、皇帝の第一騎士であると共に、秘書的な補佐の仕事も担う人物だった。

「シオンとスオウがこの穴に入って行ったんだ」

「ああ、坊ちゃん達がいらっしやっていたのですか。どうりで、皇太后様のご機嫌がたいそう麗しいわけです」

「あいつらの行動は、母上の差し金か？ とにかく、得体の知れない穴で子供達を遊ばせるのは心配だ。連れ戻して——」

「大丈夫ですよ、陛下」

皇帝の第一騎士は、同時にこの城の騎士団を束ねる長でもある。

しかも、先代の皇帝——実は現皇帝の一番上の兄であり、シオンの父親——の側近でもあった彼は、王城のことは誰よりも把握している。もちろん警備の都合上、彼にはそうする必要があったからだ。それに本当は、現皇帝とて隠し通路の存在を知らされていないかったわけではない。

長兄からは玉座と共に、政治に関する情報や権限はもちろんのこと、国主が把握しておくべき全ての事柄が引き継ぎされ、当然それには後宮の情報も含まれていた。

かつて混沌と腐敗に満ちていた王城を荒療治で改革した先代ならば、後宮に張り巡らされた隠し通路さえも最大限に利用したかもしれない。様々な事情を抱えて皇帝に近付いた女達は、時に重要な情報源でもあったのだから。

しかし、それによってすっかり平定された世を譲られ、しかもいまだ後宮に住まわす者さえ得ていない現帝にとつて、住人のいない側妃の部屋の事情などさほど興味が引かれなかったのだろう。

実際、図面として隠し通路を含めた後宮の内部構造も受け取っているのだが、それは彼の記憶の片隅にも残らなかったようだ。

第一騎士ジヨルトは、主を予定通り会議の間に促しつつ、安心させるように柔らかな笑みを浮かべて言った。

「あの抜け穴の行き着く先は、坊ちゃん達にも縁の深い者の元ですので、何の心配もございません」

「ジヨルトがそういうなら……」

最も信頼を置く側近の言葉に皇帝は納得したようだったが、やはり子供達のことの心配なのだろう。

騎士を一人彼らのお守りにつけるよう命じ、ジヨルトを苦笑させた。

最果てを求めて2

今度の隠し通路は、先に通った二本に比べて格段に長かった。

しかも、上りも下りもあつて道は平坦ではなく、暗闇にいくらか目が慣れようとなかなか困難な道のりであつた。

「こりゃ、後宮の外に続いてそうだな」

「迷わない？」

いつも何にでも積極的でぐいぐい引つ張つて行くのがシオン、気が弱そうで優しい雰囲気だがとことん付き合いいいのがスオウ。普段は別々の世界で生活している彼らだが、誰よりの仲がよく気が合う二人である。

シオンは、幾分不安げな声を上げたスオウの手をぎゅっと握つた。スオウも、シオンの手をぎゅっと握り返す。

そうすれば、二人にもう怖いものはなくなった。

最後に、大きな下りの行程があつた。

足下が滑らないように互いに壁に片手を突つ張つて支え合い、それを無事にクリアした少年達に残されたのは真つ直ぐな通路で、ついにその先が行き止まりになっていた。

これまでの例を考えると、それが出口の隠し扉に間違いないだろう。

案の上、道の終わりを塞いでいたのは大きな板で、最初の隠し通路の終点と同じく隙間から光がもれている。

シオンとスオウは手を固く繋いだまま、再び互いに利き足を振り上げた。

息ぴつたりの彼らには、もうかけ声など必要なかった。

ガコンッ——！！

出口を塞いでいた板は見事に外れて吹き飛び、少年達は終点が何処かも確かめぬまま、穴から飛び出した。

すっかりしているとはいえやはり八歳の子供である。シオンもまたスオウと同様、あまりにも長く続いた暗闇に不安を抱いていたのだろう。

「――なっ……！？ シオン？ スオウ？」

そうして、暗闇に慣れた瞳が明るさにようやく順応し始めた頃、再び少年達の耳に聞き覚えのある、そしてひどく驚いた声が響いてきた。

「あれっ？……カーティス伯父さん？」

「なんで、カーティスさんところに……？」

啞然とした顔をして二人の前に立っていたのは、シオンの母方の伯父の一人だった。

伯父といっても、元々スオウの世界の人間であるシオンの母が、父に嫁ぐ都合上カーティスの父母と養子縁組しただけで、彼らの間に血縁関係はない。

しかし、カーティスは義理の妹となったシオンの母を溺愛しているし、もちろんその息子であるシオンのこととても可愛がっている。

彼は、先ほど皇帝を迎えにきた第一騎士ジョルト率いる騎士団に属し、精鋭第一隊長という高い位に就いている。

「カーティス伯父さん、ここはどこ？」

「ここは、騎士団宿舎の私の私室だ。お前達、なぜそんなところから……いや、そもそもその穴は一体……」

シオンとスオウの元に駆け寄ってきた伯父は、ひどく困惑した様子であったが、隠し通路で汚れた二人の衣服の埃を大きな手ではたいてくれた。

その優しい手付きに安心したらしい少年達は、すぐにいつもの調子を取り戻す。

「伯父さん、第一隊の隊長さんって代々この部屋なの？」

「あ、ああそうだ。団長副長以下、長と付くものの私室は代々受継がれることになっているな」

カーティスの言葉に、シオンとスオウは互いに顔を見合わせ頷き合った。

「ってことは、いつぞやの側妃さまは、その時代の第一隊長と密会してたってことか……」

「うわあ、皇帝さまと騎士さんに二股かけてたってコト？ 三角関係かあ」

「いや、皇帝には最初の隠し通路の側妃もいたから、四角関係じゃね？」

「……お前達、一体何の話をしているんだ……」

そのあと、甥っ子達から隠し通路の存在と通じる先を聞いたカーティスは青ざめ、すぐさま塞ぐように申請すると言い出した。

今はまだ皇帝が後宮に女性を迎え入れていないからいいようなものの、いずれこの先誰かが隠し通路の先に住まうことにでもなれば、疾しいことは何一つなくても、真面目な性格の第一隊長には落ち着いてはいられまい。

面白いのにー。塞いだらもつたないよー。と文句を言う甥っ子達に溜め息を吐きつつ、カーティスは彼らに向き合った。

「そもそも、無闇に城の中をうろろしてはいけない。ここは子供の遊ぶような場所じゃないぞ」

シオンもスオウも、この生真面目な伯父がとても好きだが、いささか説教臭いところが玉にキズだと思う。

「ヤバいなあ、カーティスさんスイッチ入っちゃったよ。説教長そう……」

「よし、俺に任せとけ。伯父さんが弱いもの、ちゃんと知ってるんだー」

厳めしい顔をして腕を組み、説教モードに入った彼の前で、顔を寄せ合ったシオンとスオウはこそそと囁き合った。

「こらっ！ シオン、スオウ。聞いているのか」

そんな少年達が何を話していたのかは知らず、厳しく一喝した第一隊長だったが、小さな甥っ子が父親譲りの美しい白銀の前髪の間から、そろりと母親そっくりの紫の瞳で上目遣いに見上げてくると、うつと喉を詰まらせたように絶句した。

「カーティス伯父さん、ごめんなさい。どうか怒らないで……」

「うつ、いや……怒っているわけでは……」

「僕たち、皆が一生懸命仕事している姿を見学して、自分も将来どんな仕事に就こうか考えようって思っ……」

まだまだ幼いシオンは声も高く、全体的な造形は父親からの遺伝が濃い、大きな瞳やまろやかな頬は母親によく似ていると言われる。

そしてカーティスは、猫被りの上手い義妹の上目遣いと甘えた声に滅法弱い。

それにそっくりな甥っ子にも弱いのは当然のことで、先ほどまでの厳めしい顔つきなど忘れてしまったかのように、途端に形のいい眉尻をとろりと下げてしまった。

「そ、そうかそうか。こんな小さな内から将来のことを考えているなんて、シオンもスオウも偉いぞ」

彼はそう言っ、えへへと愛らしい様子ではにかむシオンの頭と、その隣で相手の猫かぶりに引き気味のスオウの頭を、褒めるようによしよしと撫でた。

そして、何かおやつでも食べてきなさいと二人にお小遣いを握らせ、騎士団宿舎の入り口まで送ってくれた。

どうやら騎士団は午後の集中鍛錬前の休憩中だったらしく、カーティスも甥っ子達の後ろ姿を見送ると、愛用の模造刀を片手に訓練場へと去って行った。

「お小遣い、たくさんもらっちゃったね、シオン」

「うん、カーティス伯父さん太っ腹だね。あの人相当稼いでるはずなのに、使う機会ないんじゃないのかな？」

伯父と別れた途端被っていた猫を脱いだシオンに苦笑しつつ、スオウは貰った金貨を掌で弄びながら、彼と並んで歩き始めた。

カーティスはシオンとスオウにそれぞれ一枚ずつ金貨をくれたが、金貨一枚とは庶民ならば一月食うに困らない額であり、ふらりとやってきた親戚の小さな子供にやるには多過ぎるだろう。

「金銭感覚、ちよつとヤバイよね」

「まあ、仕方ないよ。あの人、お坊ちゃんだからさ」

そんな伯父にちよつと呆れつつ、シオンは懷から懷中時計を取り出して、時間を確認した。

二人が皇太后に送り出されてから、もう二時間程経っていた。

「ちよつと疲れたね。せつかくお金もらったし、何か食べに行く？」

「だな。父上達は夕刻まで城にいるだろうし、食堂でも行つて休憩しようか」

そう言つて二人がやつてきたのは、王城で一番大きな食堂である。城内には他にもいくつかお茶や食事ができるカフェのような場所があるが、ここはいつも一番賑わっている。

休憩中の文官らしき姿もあれば、今日は非番なのかラフな格好の騎士の姿もあり、また大臣や名の知れた貴族といった身分の高い客も見受けられる。

身分を問わず利用することが許されているのがこの食堂の良い所であり、それぞれおもいおもいに食事や会話を楽しんでいる様子は、この国が如何に平和で穏やかであるかを物語っている。

それもこれも、シオンの父である先帝の偉業と、それを引き継ぎ上手く御してきた現帝の功績であり、幼いながらもシオンは彼らを誇りに思ふのだった。

シオンもスオウも昼食は皇太后に招待されて頂いたので、それほど空腹を感じているわけではなかったが、先ほどの隠し通路の行程にはいささか疲れを感じており、喉も渴いていた。

一番混み合うランチの時間帯からずれていたことで、席はじゅうぶん空いている。

とりあえず適当な席に着こうかと中を見渡していると、そんな彼らに向かって奥から手を振っている人物がいた。

「シオン、スオウ。こっち、こっちよ」

美しい金髪を長く伸ばした、シオンとスオウと同じような年頃の少女だ。

彼女の姿をみとめた途端、シオンの紫色の瞳がぱあつと輝きを増した。

「アリアーネ!!」

「あつ、久しぶり」

席の合間をぬって駆け寄ったシオンと、その後からのんびりやってきたスオウを順に見つめた少女は、にっこりと愛らしく微笑んだ。
「あなた達も城に来ていたのね。会えてうれしいわ、シオン、スオウ」

アリアーネという名前の少女は、シオンの父方の従姉である。

先帝の妹にして、現帝の姉でもある人物を母に持ち、父親は先ほど皇帝を会議の間に促した騎士団長だ。

「ミリアニス叔母さま、お久しぶりです」

「うん、久しぶりだね、シオン。スオウも元気そうで嬉しいよ」

「こんにちは、ミリアニスさん」

更に、騎士団副長という地位に就いているアリアーネの母親は、娘の向いの席に座ってシオンとスオウを迎えてくれた。

どうやら珍しく登城した娘とその母君のお茶の席に、少年達はいくタイミングで辿り着いたらしい。

彼女達もたった今席に落ち着いたところらしく、メニューの注文もこれからのようだ。

まだ背の高さが微妙に負ける一つ年上の従姉にハグを済ませたシオンは、喜びに頬を紅潮させたまま叔母に向き直った。

「ミリアニス叔母さま。今日は僕にごちそうさせて下さい」

「おや、シオン。小さいのに紳士だね」

シオンは、従姉のアリアーネが大好きなのだ。

彼女の穏やかで優しく、しかし共に騎士である両親に育てられてしつかりと芯の通った姿勢には、憧れさえ抱いている。

シオンの、「大きくなったらお嫁さんになってね」なんて可愛らしいアリアーネへのプロポーズは、既に彼が物心つくかつかないかの頃から繰り返されている。

当然、それを間近で見続けてきたスオウは、「人にもらったお金でおごるとか、胸はつてよく言えるよね」と呆れながらも、その恋路を邪魔するつもりは毛頭ない。

「アリアーネも、何でも好きなもの注文して」

「まあ、シオン。……おかあさま、よろしいのでしょうか？」

「殿方の顔を潰してはいけないよ、アリアーネ。こういう時は、甘えるといい」

そう言つて、にこりと微笑んだミリアニスの姿は、幼い子供達から見ても卓越した美しさだ。

あの美の象徴ともいえる皇太后の娘であり、隣国に嫁いだ双子の姉と共に“我が国の宝珠”と讃えられた事実にも頷ける。

その母の美を過たず受継いだアリアーネも、愛らしいかんばせをシオンに向かって綻ばせた。

「じゃあ、ごちそうになつていい？ シオン」

「もちろん！」

シオンとスオウは喉が渴いていたので、それぞれフルーツのジュースを頼んだ。

新鮮な果物を、恰幅のいい食堂のおばちゃんが目の前で絞ってくれる。瑞々しくて実に美味い。

対して、自分達もお腹は減っていないと告げたミリアニスとアリアーネの前には、少年達を啞然とさせる代物が登場した。

「……」

「……」

それは花瓶か？と思わせる程の巨大なグラスに、ぎゅっぎゅっ

詰められているのは、大量のアイスクリームと果物たち。

天辺にはででんとレギュラーサイズのワンカットケーキが乗っかっていて、その周りを生クリームがぐるりと囲んでいる。

これが、この食堂で秘かに人気の噂のスウィーツ、“プリンセス・パフェ”である。

シオンにとっては父方の叔母、ミリアニスにとっては双子の姉にあたるアマリアス王女が、隣国に嫁ぐ際に記念にメニューに加えられたという、超特大パフェだ。

見ているだけでも胸焼けしそうなそれを、母娘はそれぞれ一つずつ注文した。

数人がかりで挑んでも困難であろうと思われる甘味の集大成を、彼女達はなんと一人で食べ切るつもりなのだ。

「おいおいおいおい……」と突っ込みを入れない思いに駆られるが、しかし無邪気な笑顔でスプーンを握りしめた幸せそうな母娘を見ると、シオンもスオウも何も言えなくなってしまう。

彼らはそれぞれジュースをちゅーっと吸って目を逸らすことで、自分の心の叫びを抑え込んだ。

その時――

得物に夢中になった母娘と沈黙した少年達に、とある方向から声が掛かった。

「あつ、シオン君とスオウ君、こんなところにいた」

シオン達が着いた席は、食堂の入り口から見ると一番奥まった場所。王城の庭に面した窓辺である。

声は、その庭園の方から掛けられた。

「まあ、スマレ！」

声の主は、城に着いてすぐに別行動になった、シオンの母であった。

パフェに釘付けになっていた視線を彼女に移し、ミリアニスはぱつと瞳を輝かせる。

「兄上も、お会い出来て嬉しゅうございます」

いつまでも少女のように愛らしいシオンの母の側には、当然のように父がぴったりと寄り添っている。

「久しいな、ミリアニス。アリアーネも……息災のようだ」

彼の一向に衰える気配もない美貌は表情が乏しいのは相変わらずだが、慈しみ愛する者達を映す瞳はとても柔らかに綻ぶようになっていた。

シオンの父——先帝ヴィオラントは、窓を覗き込む愛妻のふわふわの黒髪を撫でつつ、素直な笑顔を向けてくる妹に頷き、そうして巨大なパフェを片手ににつこり微笑む姪に苦笑する。

「——ずるいつ！ ミリアンとアリアちゃんだけ、ずるい！ 私もプリンセス・パフェ食べたいっ！」

そんな彼の隣で、シオンの母スミレが、男性陣がぎよっとするような訴えをして地団駄を踏んだ。

本当に、女性の胃袋というのは男にとっては理解不能だ。

けれども、そんな妻に呆れること無く、優しく諭すように答えるのがシオンの父の常である。

「ミリアニス達とそなたではつくりが違う。腹を壊すのがおちだ、やめておきなさい」

彼は、例えば息子であるシオンがあの手を逸したパフェを食べたいと言っても、特に止めはしないだろう。

ただ、「自分で判断して決めなさい」とだけ言って、見守るはずだ。

けれど、こと妻のことに關しては、過保護というか過干渉というか、常にびんびんに神経を尖らせていて、時たま彼女に「ヴィー、いちいちうるさい。お兄ちゃんみたい」と煙たがられるほどだ。ちなみに、その“お兄ちゃん”というのがスオウの父であり、自他ともに認める筋金入りのシスコンである。

どこか冷めた子供なシオンは、そんな父母や伯父を「変な夫婦」「重度のシスコン」と呆れながらも、けれどそれがとても平和で愛すべき家族の姿であるとちゃんと知っている。それは、スオウとて

然り。

シオンとスオウは、子供のように唇を尖らせるスマイレに自分達のジューズを味見させて宥めつつ、いつの間にかグラスの半分まで減っていた目の前のアリアーネのパフェにびっくりして、目をまん丸にして互いの顔を見合わせた。

「そうそう、兄上。今日はシオンがご馳走してくれると言うので、アリアーネと甘えたのです。その申し出がとてもスマートで、いつの間にか素敵な紳士になっていて、驚きました」

「……ほう、シオンが」

一方、こちらも窓から顔を出した義姉の小さな口に、せつせと自分のアイスを食べさせていたミリアニスは、全くの他意もなく、ただ甥っ子の頼もしい様子をその両親に嬉々として報告した。

それに対し、シオンの父はちらりと意味深な視線を息子に寄越し、母はきよとんと首を傾げる。

シオンはそんな父母から思いつき目を逸らせた。

「グイー、シオン君にお小遣い渡しといたの？」

「いいや」

「ふうん……じゃ、シオン君？ どこで仕入れてきたの？」

「……」

結局は、淑女相手に格好をつけて奢ると言いながら、実はその資金は人にいただいたばかりのお小遣いであつたという、あまりスマートではない事実が大好きな従姉にも知られてしまったわけで、シオンはちよつとばかり拗ねてしまう。

その唇を尖らせた姿が、母親であるスマイレのそれとあまりにそっくりで、彼の父親はまた苦笑に瞳を細めながら息子に言った。

「城内を探検していると皇太后陛下にうかがったが、仕事をしている者たちの手を煩わせてはならないぞ」

「……分かってます」

「ならばよい。気が済んだら最初に通された客室に来なさい。帰りの時間はそなたたちに合わそう」

「……はい」

不貞腐れたシオンの頭を、窓辺から伸びてきた大きな掌が優しく撫でてくれた。

父ヴィオラントは息子の隣に座った甥っ子の頭も同じように撫で、妹とその娘に暇の言葉をかけると、最後に大きく掬ったシヨコライスを口に頬張った妻の腰をさらい、庭園の奥の方へと去って行った。

アリアーネが、「ごちそうさま」と言ってスプーンを置いたのは、それとほぼ同時であった。

「……」

「……」

名物プリンセス・パフェが人気の理由は、数人でシェアしてワイワイ食べて楽しめるといふのもう一つ、実は大柱に掛けられた時計が半周——つまり三十分以内に一人で完食すればタダになるというルールにある。

普通に考えれば、あの大量のアイスを一人きりで食べ切るなど到底無理な話であるが、時々ほんの稀に、それをやり遂げてしまう強者が登場する。

弱冠九歳の可愛らしい公爵家令嬢も、その一人であったようだ。と、いうことは、つまり。

ルールに則りアリアーネのプリンセス・パフェは無料になり、結局シオンは大好きな彼女に奢ることができなくなってしまったのだ。がつくりと意気消沈してしまった親友の肩を、スオウはただ無言でポンポンと叩いてやった。

最果てを求めて3

騎士団長と副長の間に生まれた、まさに騎士のサラブレッドともいえる少女は、残念ながら父母のように騎士を目指してはいないようだ。

オルセオロ公爵家の一人娘アリアーネは、本を読むのが大好きな少女で、自身も将来物語を書くような仕事に就きたいと思っている。この日も彼女の登城の目的は、王城にある図書館で本を探すことだったようだ。

母ミリアニスは、こちらはゆつくりと巨大パフェを食べ切って、皇太后の第一騎士という職務に戻って行った。

まだ城内探索を続ける気ながらも、明確な行き先の予定のないシオンとスオウは、とりあえずアリアーネについて図書館に行ってみることにした。

二人も本を読むのは好きな方であるし、城の蔵書の数に凄まじいので見ていて飽きることはないのだ。

それに、せっかく会えた大好きな従姉ともう少し一緒にいたいというシオンの願いに、スオウも黙って付き合ってやることにしたのだ。

いつもの大人びて冷めた様子なりを潜め、八歳の少年らしい無邪気さでアリアーネと手を繋ぐ従兄を、スオウは一步後ろを付いて歩きながら見守ってやった。

図書館は、食堂からはそう遠くない位置にある。

王宮内とは廊下で繋がっているとはいえ、それ自体が独自の建物で二階建てになっている。

大きな扉をぐぐり抜けると、すぐに本棚が立ち並ぶ光景がパノラマに広がり、圧巻である。

ここで無闇に本を探そうとすれば、それは全くの徒労に終わるであらう。

本棚はきちんと分野ごとに分けられ整然と管理されているが、何にしる本の数が多過ぎる。

そんな時、強い味方になってくれるのが、司書の存在である。

中でも、この広大な図書館をたつた五人で切り盛りする精鋭司書軍団のトップ、ふさふさの白い髪と髭を蓄えた見た目も仙人のような司書長は、ちょっとした名物爺さんだ。

シオンの父曰く、彼がまだ幼い頃からもう既にそのままの姿で鎮座していたらしいので、もしかしたら本当に仙人かもしれない。

とにかく、管理する全ての書物のタイトルと著書はもちろんのこと、その本の配置までも完璧に頭に入っているというコンピュータ並のデータ力で、図書館の主として崇められている。

午後の休憩時間は終わったのか、図書館で本を眺めている者の姿は疎らであった。

シオンもスオウも、ここが混雑した光景はいまだ見たことはないが。

「おじいさん、こんにちは」

もちろん、この図書館の常連でもあるアリアーネも、司書長とは顔見知りである。

彼は、長く伸びた真っ白い眉毛の下に隠れて、開いているのかいないのか分からない目を更に細め、挨拶を寄越した少女と少年たちにゆったりと頷いた。

アリアーネは司書長に欲しい本の場所を尋ね、彼女が若い司書と共に本を取りに行っている間、シオンとスオウは何とはなしに窓辺に寄った。

すると

「あ、父上たち……」

「ヴィーさんとスミレちゃん、どこへ行くんだらうね？」

窓の向こうには庭園が広がっていて、遠くにちらりと先ほど食堂

で別れたシオンの父母の姿が見えた。

「伯父さま達、いつも仲睦まじくいらっしやって。本当に素敵なお夫婦ね」

目的の本の貸し出し手続きを済ませたらしいアリアーネも、従兄弟達の隣に並んでにつこり微笑み、夫婦の背中を見送った。

彼女の言う通り、シオンの両親であるレイスウェイク大公爵夫妻は実に仲が良い。

特に父の母への溺愛ぶりは、実の息子であるシオンさえも時々呆れるほどで、彼の世界は妻を中心に回っていると言っても過言ではない。

両親が仲が良いというのは子供にとっては喜ばしいことだが、その睦まじさに常時当てられっ放しのシオンとしては、「ちよつとは傍目を気にして遠慮してよ」と言いたくもなる。

しかしながら、大国一的美貌とカリスマ性を誇った先帝閣下と、愛玩人形のように愛らしく不思議な魅力をたたえた少女の恋物語は、様々な脚色を加えられつつ女子の間では憧れの象徴となっている。

実は、彼らをモデルにした恋愛物語が既出版され、世の乙女のバイブルとして絶大な人気を誇っているとか。

本好きな乙女であるアリアーネもその物語の熱心な愛読者であり、シオンの父母を見る彼女の目には、いつも若干フィルターが掛かっているようだ。

さて、アリアーネの用事は、目的の本が見つかったことで終了したらしい。

これからどうしようか、と彼らが言葉を交わそうとした時、雲の上の仙人のようにカウンターの向こうに鎮座していた司書長が、よつこらしよつと立ち上がった。

そして、彼は窓辺にたむろしている子供達をちよいちよいと手招きした。

「おいで、坊ちゃん嬢ちゃん達。いいものを見せてあげようねえ」

彼はそう言う、年齢を感じさせない軽い足取りでひよいひよいと本棚の合間を歩いて行き、シオン達も誘われるままにその後を追った。

司書長は、途中ですれ違った部下に「奥に行っているよ」と声を掛けると、子供達においでおいでをしながら、図書館の奥へ奥へと進んで行く。

奥へ進めば進む程人影は疎らになり、ついに突き当たりに着いた頃には、周囲に司書長とシオン達四人の他には誰もいなくなっていた。

一番奥の本棚には、分厚い辞典の全集が納められていて、一冊ずつでも相当重いだろつと予想されるが、司書長は徐にそのうちの一冊を取り出したかと思うと、それを一番下の棚に差し入れた。

更に、別の本を取り出しては場所を移し、それを何度も何度も繰り返す様子を戸惑いながら眺めていたシオン達の耳に、やがて――カチリ……と、小さな小さな音が聞こえた。

それは何か、古い鍵か仕掛けが外されたような音であった。

弾かれたように顔を上げた子供達の前で、納められた本の重みでびくともしないだろうと思われた本棚が、ススツ……と音も無く横にスライドした。

その向こうに頑丈そうなたつくりの大きな扉が現れ、司書長はポケットから鍵の束を取り出す。

鍵を外して開いた扉の先に広がっているのは真つ暗闇で、司書長の後に続いて恐る恐る足を踏み入れたシオン達だったが、灯りが灯されると「わあ……！」と思わず感嘆の声を上げた。

そこに納められていたのは、この場所が図書館であるからやはり書物なのだが、それらは四方の壁に据え付けられた本棚にびっしりと詰まっている。

しかも元来二階建て建造物であるはずが、この奥の部屋だけ一階の天井をぶち抜いてあるらしく、本棚は遙か高く建物の天辺に向かってそびえ立っている。

最頂の段の本を取るには、相当の苦労が必要だろう。

よくよく見渡せば、四方にはそれぞれ長い長い梯子が用意されており、上の方の本が欲しければそれに登るしか手段はなさそうだ。

「ここには、古くて貴重なものがたくさん保管されておるんじやよ。傷みが進んでいるものも多くてのお……我々司書が少しずつ修復してから表の棚に移しておる」

それらはけして門外不出の極秘文献や資料ではなく、最終的にはこの図書館を訪れる全てが者が閲覧できるようになるのだが、まだ表に出せる状態ではないので、シオン達も見て回るのは構わないが不用意に手を触れてはいけないと忠告された。

もちろん、分別ある子供達は司書長の言いつけを守ったし、彼が目的の数冊を本棚から選んでいるのを黙って見守っていたが、そんな中ある一点の不自然に瞳が引きつけられた。

それは、これまで幾つもの隠し扉を見てきたシオンとスオウだからこそ、気付けたのかもしれない。

鍵を外して入ってきた扉から見て、ちょうど対角。

奥の壁にひっそりと、それは巨大な本棚の影に隠れるようにして、実に慎ましやかに存在した。

一つだけ、普通サイズの本棚。

その中には、さっき見たような辞書の大全集が詰まっている。

思わず駆け寄った少年達は顔を見合わせ、「おや？」と振り向いた司書長に対し、シオンは丁寧に関いかけた。

「おじいさん、この本は触ってはいけませんか？」

「……ふむ、丁寧に扱ってくれるならば構わないよ」

司書長は、一瞬意味深な様子でシオンをじっと見据え、それからいつも通り優しく顔に綻ばせて答えた。

「えっと……、一番上の段の右から二番目を、一番下の段の左から三番目に。上から三段目右端のを五番目まで移動。それから……」

辞書はやはり大きく重く、まだ幼い少年達の手には余ったが、シオンはスオウと力を合わせてそれらを次々と移動させていった。

その後ろでアリアーネは不思議そうに首を傾げ、司書長は面白そうに目を細めて黙って見守る。

やがて、彼らはぜいぜいと息が上がりつつも辞書の移動を終えた。しかし、特に何かが起こる気配はない。

この本棚も先ほどの入り口のような仕掛けになっていると踏んだシオンは、司書長がさっきやった通りに真似てみたのだが、どうやら鍵は同じではなかったのだろうか。

うつむ、と眉間に皺を寄せて腕を組んだ彼だったが、その後ろから皺くちやの手が伸びてきて、シオンの父親譲りの白銀の髪を優しく撫でた。

「いやはや、さすがはヴィオラント様のご子息じゃ。鍵の順番をあの一瞬で覚えなすったのかい」

司書長は「子供とて侮れぬのお。恐れ入ったわい」とにこにこ笑い、「ご褒美に教えてあげようねえ」と続けて、シオンとスオウが最後に動かした辞書を手に取った。そして、それを別の場所に嵌め込むと、

——カチリ……

聞き覚えのある小さな音が、天井の高い部屋の中に響いた。

「一番最後だけ、場所を変えてあったの？」

「そうじゃよ。今わしらがいる部屋自体は特別秘密ではないが、これより更に奥の存在はこの司書達にも教えてはおらん」

「えっ……」

「まあ、坊ちゃん達は王族じゃからのお。知っても問題はないじやろうて」

ただしむやみに口外しないよう言い聞かせてから、司書長はススス……と鍵の外れた本棚をスライドさせた。

本棚はやはり、重い辞書が何冊も詰まっているとは思えないほど軽やかに動き、その背後からは頑丈な作りの扉が現れた。

司書長は己のポケットをあさり、先ほど取り出した鍵の束ではなく、一本だけ別になっていた鍵で扉を開いた。

その奥はやはり真っ暗で、すぐ先の足下さえ全く見えない。

シオンとスオウが顔を見合わせていると、司書長は真っ白い髭の奥で楽しそうに笑った。

「なに、おかしいなところにや通じとらんよ。どこへ続いているのか見てきてごらん」

そう言われると行かないわけにはいかない。

元々シオンとスオウは王城の探検をしていたのだし、思い掛けず出会った秘密の通路にはワクワクする。

特にシオンにしてみれば、大好きなアリアーネの手前、「真っ暗過ぎて怖いので行きません」など、かつこわるくて言えるわけが無い。

アリアーネは、この後家庭教師との約束があるとのことで、秘密の通路には入らず帰宅することになった。

「真っ暗なのに大丈夫なの？」と心配する彼女に、「平気平気」と胸を張って返事をしたシオンは、後に引くわけにはいかない。

そうなると、とことん付き合いのいいスオウも、もちろん一緒だ。司書長は、二人に小さなランプを貸してくれた。

灯りが小さいので遠く先は見えないが、足下が照らせるだけでもましである。

ランプの灯りを掲げて奥を覗き込み、意を決したシオンはふと、背後に佇む老人を振り返った。

「おじいさん、ひとつ聞いても？」

「何かね？」

「父上は……この奥のこと、知っているんですか？」

司書長はそんな質問に是とも非とも答えず、ただにっこりと笑みを深めた。

シオンは、それが愚問であつたことを知る。

あの父が、この王城の全てを知らないわけがないのだ。

何となく悔しい思いを抱きつつ、シオンは片手にランプを掲げ、もう片方でスオウと手をしっかりと繋いで、歩き始めた。

「行くぞ、スオウ」
「うん」

ランプの仄かな灯りが見えなくなると、司書長はそつと扉を閉じて鍵をかけた。

再び本棚を元の位置に戻し、辞書を移動させてそれが動かないようからくりを仕掛けると、アリーネを促して裏の書庫からも出る。「おじいさん、あの通路はどこに通じているんですか？」

「外じゃよ。詳しい場所は、また彼らに聞くといい」
そう答えた司書長は窓辺に寄り、目の前に広がる庭園に目を細めた。

今度の通路は、それほど長い距離ではなかった。
ランプがあるせいで、幾分かは歩きやすく、通路の様子も見渡せた。

簡易な作りであり、やはり横幅自体は広くはないが、高さはあって大人でも身を屈めずに歩いて進めそうだ。

途中には下りの階段があり、シオンとスオウはランプで足下を照らしながら慎重に進んだ。

それからしばらくまっすぐに進むと、今度は上りの階段に辿り着いた。

どうやら地下を通ってどこかに通じているようだ。

階段を上り切ると、遂に目の前に扉が現れた。出口であろうか。

シオンはようやくそこでスオウと繋いでいた手を放し、扉の取手を回してみた。

幸い施錠はされておらず、難なく扉は開いて、二人は外へと飛び出した。

「わっ……ここ、庭園？」

「外に通じてたんだな」

扉の向こうに広がっていたのは、王城が誇る見事な庭園の風景で

あつた。

青々と葉が茂り、様々な色や種類の花々がシオンとスオウを出迎えてくれた。

シオンはランプの灯りを消し、きよろきよろと周りを見渡してみる。

「庭園のどの辺だろ？ 木とか花とか、どれも同じに見える」

「同感」。現在地不明」

シオンは父のように植物に精通していないし、そもそもあまりガーデニングにも興味がないので、王城の庭園にも馴染みが無い。

綿密に花の特性や季節ごとにきちんと分けされている庭は、見る者が見れば自分が今どの辺の位置にいるのか想像もできようが、残念ながら知識のない少年達には皆目検討もつかない。

人に尋ねようにも、自分達以外どこにも人影は見えず、庭の中で仕事をしているであろう庭師の姿さえ見付けられない。

出て来た扉の方を振り返ってみると、それはどうやら大きな倉庫の裏のようで、人の出入りが多い建物ではないようだ。

もちろん、出発点である図書館の建物とも全然違っていた。

仕方なく、とりあえず二人は道に沿って歩いてみることにした。

それはまるで、迷路のようだった。

両側を緑の壁に挟まれて、くねくねと曲がったと思ったら突き当たり。仕方なく戻って、また違う方向に進むという具合。

そうこうして辿り着いた先に、シオンとスオウはゆるりと蔓が絡まった緑のアーチを発見した。

それこそがようやく迷路の終着点だろうか、中を覗き込んだ二人の視線に人影が映る。

しかもそれは、彼らを城に連れてきてくれたシオンの父の背中だった。

ああよかったと、ほっと安堵の溜め息をついて彼に声を掛けようとしたスオウの口を、しかしシオンが徐に両手で塞いで木の影に引

っ張り込んだ。

「——なっ、もう、何するのさっ！」

「しーっ！しーっ！！　ばか、声がデカいよ」

文句を垂れるスオウを黙らせると、シオンは垣根の隙間を指差し、ひそひそ声で「よく見てみる。そして、空気を読め」と告げた。

「……」

言われるままに覗き込んだスオウが目を凝らすと、アーチを潜った奥にはひっそりとした東屋が作られ、その下には白いベンチが一つ設えられているのが見て取れた。

そして、こちらに背中を向けたシオンの父はそのベンチの前に跪き、男の大きな身体で最初は見えなかったが、彼の向いにはどうやらシオンの母もいるようだ。

奥から真っ白く華奢な両腕が伸びて来て、ふわりと彼の背中に回される。

普段はドレスに隠れてけて見えないはずの小さな膝小僧が、見開くスオウの目に飛び込んできた。

「しっ、ししししし、シオンっ……！！？」

「だから静かにしろってば。無粋なやつだな」

先ほど、シオンの父母は庭で何してるんだらうと図書館の窓から見送ったが、どうやら仲睦まじい彼らは、昼日中から庭園の一角で二人きりの時間を楽しんでいたらしい。

それに気付いたスオウは全身真っ赤になり、シオンは慣れた様子で垣根の隙間から両親を観察——つまり出歯亀した。

「やっ、やめようよ、シオン！　覗き見なんて、いやらしいよ！」

「何言ってるの、このピュアっ子が」

スオウは覗き穴からシオンを引き剥がそうとするが、彼はニヤニヤ笑っばかりで聞く耳を持たない。

それどころか、スオウの首をホールドして、「お前も見とけよ。優斗伯父さんよりかは参考になるぞ」と、垣根と一緒に顔を突っ込ませた。

シオンは上手く隠れているつもりだったし、スオウも顔を真っ赤にしながら両手で口を塞いで、声を立てないようにした。

しかし、やはり相手が悪過ぎた。

背中を向けていたシオンの父が、首だけゆるりと振り返ったかと思つと、その視線は少しも彷徨つこと無く真っ直ぐに出歯亀少年達を捉えた。

息を呑む彼らと、バツチリ目が合う。

次の瞬間、シオンの父の口角が、くつと上がった。

「ぶわっ……父上、俺たちがいるの分かってやってる！　タチ悪うう！」

「わっ、わっ、わあああーっ！！」

父の挑発的な笑みに青ざめたシオンと対照的に、ゆでダコのように顔を真っ赤にしたスオウは、連れの腕を強引に引っ張ってその場から走り出した。

「もうもう、ばかばかばか、シオンのおばかつ！　だからやめようって言ったじゃんかっ！！」

「ちよっ、おい！　落ち着けて、スオウ！」

パニックに陥ったスオウは我武者らに走り続け、シオンは戸惑いながらも、引っ張られるまま付いて行くしか無かった。

一方、シオンの父ヴィオラントの腕の中で、甘い溜め息をついた母スミレは、大きな紫色の瞳をパチクリさせた。

「なんか今、聞き覚えのある声がしたけど？」

上気してとろりとした顔で問いかけられたヴィオラントは、先ほどの挑発的な笑みとは正反対の、甘く蕩けるような微笑に口端を緩め、妻の唇を柔らかく啄んだ。

「うむ。……だが、もう去った」

「……あつそ」

限られた者しか知らない秘密の庭園に、仲睦まじい夫婦の邪魔をする者はもう現れなかった。

そうして、ようやくスオウの興奮が収まった頃。

「……で、ここ、どこ？」

「……さあね」

シオンとスオウは再び緑の迷路の中。

自分達が今どこにいるのか、全く分からなくなってしまうていた。しかも、元来た道と反対側に走って来てしまったようで、図書館から通じていた扉にさえ戻ることが出来なくなった。

それから二人は、ひたすら庭園の中を歩き回った。

しかし、出会うのは鳥や虫ばかりで、誰も少年達に道を教えてはくれない。

やがて、空が赤く染まり始めた。

夕刻が迫っていることに焦り出したシオンとスオウが、いい加減なりふり構っていないと、大声を張り上げて助けを呼ぼうとした時、彼らの目の前に蔦に塗れた古びた扉が現れた。

「……シオン」

「……うん」

冷静に考えれば、そのような不審な扉を開いて入り込むより、誰か大人に気付いてもらえるよう大声を上げる方が得策であるが、シオンもスオウも半日近く王城の中を歩き回って相当疲れていたし、何より彼らはまだまだ幼い子供だった。

とりあえず建物の中に入ってしまったえばどうにかなるのではと錯覚し、迷うことなくその扉に飛び込んだのだ。

もう何年も使われていないような様子だったが、鍵もかかつてはおらず、それは少年達を容易く迎え入れてくれた。

中は、もちろん灯りなどなく、真っ暗闇であった。

司書長に貸してもらったランプは、我武者らに走っている内に落としてしまったようで、もう手元にはない。

シオンとスオウは互いに手を握り合い、壁を伝って一步一步前に進むほかなかった。

途中には大きな上りの階段があり、彼らは疲れた足に叱咤しながら

ら這うように上った。

やがて、前方に微かな光が見えた。

それは、疲れ果てた少年達には、眩い希望の光に見えた。

彼らはだつと駆け寄り、最後の力を振り絞って互いの両足を引き上げた。

そして

ガコンッ——！！

蹴破った感触は、騎士宿舎の第一隊長の私室に通じるそれと、ほぼ同じだったように感じられた。

明るい光に包まれた途端、シオンとスオウは手を繋いだまま光の中にとび来んだ。

着地した地面は何故か、「ぐえっ……！」と潰されたカエルのような声を上げたが、それに構っている余裕など少年達にはなかった。

何故なら

「——やあ、おかえり、坊やたち。探検は楽しかったかな？」

人の気配にほつと顔を上げた彼らを、両腕を組んで仁王立ちして見下ろす人物がいたからだ。

「わーっ！ 魔王だーっっ！！」

「鬼だ、般若だーっ！！」

優しい声色と微笑みを浮かべた口元を裏切る、真っ黒いオーラを纏った相手はシオンの父の弟、この国の宰相クロヴィスその人であった。

通路の終着点は、なんと泣く子も黙る宰相閣下の執務室だったのだ。

実は、甥っ子達を心配した皇帝ルドヴィークの命で、本当に騎士

の一人が少年達をサポートすべく後を追っていたのだが、図書館に入った所で彼らを見失ってしまった。

司書長にその所在を尋ねても、庭園にいとだけしか教えてもらえず、仕方なく同僚の応援を得て探したのだが、夕刻になっても彼らの発見には至らなかった。

その報告を受けたルドヴィークは慌て、「心配ない」と言う彼らの両親を振り切って、騎士団に子供達搜索命令を出してしまったのだ。

かくして王城は大騒ぎになり、その事情は当然宰相であるクロヴィスの耳にも入っていた。

「叔父さんも、とっても心配したんだよ。シオン君、スオウ君。ええそれはもう、仕事が全く手に付かないくらいにね」

彼は真っ黒い笑みを浮かべたまま、顔を引き攣らせる甥っ子達の首根っこをぐわしつと掴んだ。

「ほら見なさい。私の有能な副官も、君たちを心配し過ぎて使い物にならなくなってしまった」

その言葉に、シオンとスオウが自分達の足下に目をやると、机に突っ伏してしまった大男の姿があった。

なんと、先ほど二人が暗闇を突破すべく蹴破ったのは、宰相の副官の執務机のすぐ後ろに掛かっていた大きな絵画だったのだ。

頑丈な額に入れられたそれはもちろん、何も知らずに背中を向けて政務に励んでいた副官を直撃し、更にその上にシオンとスオウが着地した。

如何に文官らしくない筋肉に包まれた男とはいえ、八歳男児二人分の体重を不意打ちで食らうのは辛かろう。

彼は右手にペンを握ったまま、伸びてしまっていた。

「さて、君たち。……どうしてくれましょうか」

いつそ猫なで声にも聞こえる優しい音で、「ねえ？」と覗き込んできた宰相閣下の青い瞳の奥がめちゃくちゃに怖くて、シオンとスオウは震え上がって叫んだ。

「うあああ、ごめんなさい！」
「ごめんなさい、もうしませんっ！」

少年達の探検は、女の戦場後宮に始まり、宰相閣下の執務室に終わった。

彼らはそこを“伏魔殿”と呼んで恐れ、以後滅多なことでは近付かなくなった。

その日の夜。

シオンが何年かぶりにおねしょをしまったのは、女官長マーサと二人だけの秘密である。

スオウが何年かぶりにおねしょをしてしまったのも、母と二人だけの秘密である。

<おわり>

最果てには届かぬ

「だめだよ、まずいよ、やめようよ！」

「なによー、意気地なし。ママはシオン君をそんな軟弱な子に育てた覚えはありませんよっ」

「オレだって、スミレちゃんに育てられた覚えはありませんよっ」
そう言ったシオンの柔らかなほっぺを、「なまいきい」と左右にぶにーっと引っ張ったのは、彼のキュートな母上だ。

息子の目から見ても、お人形のように可愛らしい彼女は、シオンの父の宝物でもある。

そんな母スミレとシオンが、何を騒いでいるのかというと、まずは今彼らがいる場所が関係してくる。

そこは、グラディアトリアの王宮の中——今は、現皇帝ルドヴィークの生母である皇太后陛下が主を務める、後宮の一室。

先日、シオンと従弟のスオウが王城探検をした際、最初に訪れた側室のための部屋であった。

つまり、寝室のクローゼットの中に隠し扉がある、あの部屋だ。ではなぜ、スミレとシオンがそんな場所にいるのかと言うと……

「シオン君とスオウ君だけ、楽しむなんてずるいつ。私も、探検したかった」

そうスミレが、たった八歳の息子相手に駄々をこねたからだ。

「そういうことはね、父上の前で言ってよね」

「言っても、ヴィーは許してくれないに決まってるもん」

「……分かってるんなら、言わないでよ」

父ヴィオラントの彼女に対する溺愛の度合いは常軌を逸しており、身内のシオンでも時たま対応に困るほどである。

確かに、城中を巡らせた隠し通路をスミレが探検するなど、怪我

でもしたらどうすると言って許さないに違いない。

その通路自体については、前皇帝である彼は危険のないものと把握しているが、灯りもないし手入れもされていない穴に、愛する妻を決して行かせたりはしないだろう。

そうでなくても、シオンは先日スオウと二人で迷いに迷ったあげく、ようやく脱した穴の先が泣く子も黙る宰相閣下の執務室で、真っ黒い笑顔の叔父クロヴィスに震え上がったばかりだ。

あの時、父はまったく怒らなかったが、母が関わるとなると話は別である。

「何かあつたら、オレが父上に叱られるんだよ？ 勘弁してよ、スミレちゃん」

「じゃあ、いいよ。シオン君と一緒に来なくても」

スミレはそう言うのと、クローゼットのドレスをかき分けて奥の隠し扉の留め金を外した。

そして、中心を縦軸にくるりと回転した扉を見て、「うわっ、忍者屋敷ー」と息子と同じ感想を述べると、開いた穴にさっさと入って行ってしまった。

当然、シオンは焦って後を追う。

「待つて、待つてつてば！」

「来なくていいって」

「スミレちゃんを一人で行かせたら、それはそれで怒られるに決まってるでしょ！」

「あっそう」

シオンの気など知らず、我が道を行くスミレは、隠し扉を潜るとすつくと立ち上がった。

「危ないよ！ 天井低いんだから、頭打つて！」

「打たないよ」

焦って叫んだシオンに返ってきたのは、なんともん気な答え。確かにぎりぎり、スミレの頭は通路の天井に届いてはいなかった。常々母は小柄だとは思っていたが、改めて彼女がこの世界の女性

に比べて格段に小さいということを、シオンは思い知った。

背は小さいし、手足は華奢だし、こんなにちんまい人間から自分が生まれてきたなんて、いまだに信じられない。

ちよつと乱暴されたらすぐに壊れてしまいそうで、彼女を大切に大切にする父の気持ち、少しは分かったような気がした。

「もう……ほら、真っ暗で危ないから、手を繋ごう」

「うん」

「転ばないでね。絶っっ対、だよ？」

「はいはい」

シオンは母の手を取ると、柔らかなそれを引いて歩き始めた。

幸い、この最初の通路は比較的短く、しかも行き着く先は皇帝の私室と判明している。

ちよつど前回通ったのと同じくらいの時間であるし、皇帝であるシオンの叔父ルドヴィークが部屋にいるかもしれない。

彼がいれば、夫に黙ってうろろろするのはやめると、一緒になつてスマレを諷めてくれるに違いない。

そう期待して辿り着いた通路の先は、やはり先日スオウと辿り着いた時同様、カモフラージュの板——変わっていなければ壁掛けの絵画で塞がれていた。

「この扉は、どうやって開けるの？ シオン君」

「これは扉じゃないから、強引に押して開けるんだよ」

シオンはそう言うと、スマレを少し後ろに下がらせて、自分は右足を大きく振り上げて力一杯出口を蹴った。

ガコンッ——！！

少年一人の力でも難なくそれは吹っ飛んで、視界はとたんに明るくなった。

そうして案の定、開いた穴の向こうから、前回と全く同じ驚いた声が返ってきた。

「——なんだ、一体っ……って、またかシオン！」

「ごめんよ、ルド兄。休憩中に」

「あつ、ルドー」

「——っ！？ スツ、スマレ！？」

やはり、すぐ脇のソファで休憩していたらしい皇帝ルドヴィークは、吹っ飛んだ絵画の向こうから顔を覗かせた甥っ子に呆れた顔をし、さらにその後ろからひょっこりと現れた人物を見て、声を裏返して叫んだ。

ルドヴィークはその昔、スマレに淡い恋心を抱いた時期があり、ようやく諦めがついた今でも、彼女のことを特別気にかける様子は変わっていない。

彼は慌てて穴に駆け寄ってくると、ぴよんと飛び降りたシオンに倣おうとしたスマレを止め、自らの手で丁寧に抱き下ろした。

「何やってるんだ、スマレは。シオン、だめじゃないか！」

「……なんで、可愛い八歳児の僕が怒られるのよ。逆でしょ」

まったく、父といい叔父達といい、スマレが関わるといろいろと大人げない。

シオンはルドヴィークの理不尽な叱責に、半眼になって彼を見上げた。

それにはつと我に返ったらしいルドヴィークは、今度はスマレに向き直り、ぎゅっと眉間に皺を寄せて精一杯厳しい顔をして見せた。「また、お前はうるうるして。兄上は、このことをご存知なんだろうな？」

「ご存知ないと思いますケド」

「なっ……！　じゃあ、今すぐ兄上のところに戻れ！」

シオンの期待通り、皇帝は自由人な母を諫めてくれた。

普段は物腰柔らかで優しい雰囲気のルドヴィークだが、スマレに関わると口調が荒くなり、おそろくいろいろな必死な感じが客観的に見えて少し面白い。

しかし、やはりスマレの方が一枚も二枚も上手のようで、彼のそれなりに迫力のある美貌をもとせず、ちょこんと無邪気な様子で小首を傾げると、何事もないように言葉を続けた。

「ヴィーは、何ちゃら研究室に行つて忙しいのよ。お仕事だもの、邪魔しちゃダメ」

「……なんちゃら？」

スミレのいい加減な説明にきよとした皇帝に、シオンは仕方なく通訳を買つてでた。

「植物関係の研究室でしょ。ちょうど、ルータスおじさんも来てるらしくて、セバスチャンの成長速度がどうのって、よく分からないこと言つてたよ」

「そうか……では兄上は、用事を済ませる間、お前達にどこかで大人しくしているようおっしゃらなかったか？」

「おっしゃらなかった」

「いや、おっしゃったよ、スミレちゃん。おばあさまのところになさいって、言われたでしょ？ うんって、頷いたでしょ？」

「そうだったわけ？」

明らかにとぼけてみせる母にため息を吐きつつ、シオンはとにかくこれ以上彼女をうるうるさせないために、協力を求めるよう叔父に目配せをした。

それに心得た風にルドヴィークも頷いたが、やはり一筋縄ではないのがシオンの母である。

彼女はうーむと腕を組んで考え込んでいたと思ったら、「ちよつと失礼」と断ると、おもむろに皇帝陛下のクローゼットに駆け寄つて開いた。

実はその内部に、この部屋のもう一つの隠し扉がある。

彼女のあまりの行動の早さに、一瞬呆然と見守つてしまったシオンとルドヴィークだったが、その小さな身体がクローゼットの中に消えると、慌てて後を追った。

「こらっ、スミレ——！」

「スミレちゃん、待つてって！」

そうして辿り着いた先は、もちろん最初とは別の側室用の部屋。その、クローゼットの中であつた。

シオンとルドヴィークがスミレに追いついた頃には、彼女はすでに両側から操作できるようになった留め金を外し、出口であるクローゼットから這い出したところだった。

「うーむ……」

スミレは小難しい顔をして腕を組み、仁王立ちして部屋の中をぐるりと見回していた。

ようやく床に降り立ったルドヴィークが、その背を怒鳴りつけようと口を開きかけた時、彼女はくると彼を振り返ると、大真面目な顔をして言った。

「ルド。本命の愛人を住まわせるなら、こっちの部屋ね。浮気するならするで、本妻さんに絶対分らないようにするのも大人の礼儀だから。しっかりね」

「――なっ……!!」

年下の義姉にさも偉そうに忠告された皇帝は、愛人どころか妻の一人もまだ迎えていないのだ。

彼があまりのことに口をパクパクさせていると、その隙にスミレの瞳がある一点をロックオンした。

彼女の視線の先には、壁に掛かった大きな絵画。

シオンは、自分とスオウと同じ勘が、今まさに母にも働いたことに気づいた。

あの絵画の向こうには、さらに別の場所が続く隠し通路が控えているのだ。

「――ルド兄っ！ 我に返って！」

自分ひとりで母を止められる自信のないシオンは、ショックで固まっている叔父を叱咤し、もうすでに絵画を外しに掛かっているスミレに追い縋った。

「スミレちゃん、もうやめなよ！ 父上にバレない内に、おばあさまのところに戻っておこう！」

「おばーさまは、ママをお人形にして遊ぼうと企んでいるから、戻りたくないんですよ」

一度はヴィオラントの言いつけ通り、皇太后の部屋で大人しく待っていてしようとしたスミレだったが、彼女と彼女の侍女が不穏な笑みを浮かべて、奥から大量のドレスを持ち出した瞬間、ぴゅーと脱兎のごとく逃げ出したのだった。

ついでに、一緒に用意されていた女兒用のドレスが、一体誰に着せるためのものであるのか——スミレと一緒に逃げ出てきたシオンは、考えたくもない。

皇太后陛下曰く「シオンはヴィオラントの小さい頃にそっくりですけれど、それよりは少し中性的だと思いますの」だそうだが……。そうこうしている内にも、絵画は外れて壁にはぽっかりと穴が開いた。

しかし、よじ登るには、前回のシオン達同様スミレには少し高過ぎる。

彼女はうーんと顎に手を当てて考え込み、離れた場所にある椅子を眺め、そして焦った顔をして近付いてきた皇帝を見た。

「スミレっ、いい加減に……」

「——ルド、だっこ」

眉間に青筋を立て、再度怒鳴りつけようとしたルドヴィークに向い、スミレは「ん」と両手を差し出して、上目遣いでねだった。

その瞬間、かーっと顔を真っ赤にした皇帝の手は、操り人形のように彼女の意のままに動き、その小さな身体を抱き上げさせて、まんまと穴に到達させた。

「——ルド兄の、ほかあ！」

「……はっ、私は一体何を……？」

穴に潜り込んでしまった母に焦り、シオンは役立たずな伯父に思いつきり悪態をつくくと、呆然と立ち尽くした彼の身体を器用によじ登って、壁の穴へと飛び込んだ。

そして、暗闇の先にちらりと見える、母の淡い色のワンピースを必死で追いかけた。

「スミレちゃんっ！ほんとにだめだから、この道はっ……！」

この通路の先は、シオンの伯父であり、スミレにとっては血の繋がらない兄である、騎士団第一隊長カーティスの私室に繋がっているはずだ。

しかし、先日自分の部屋と後宮の一室が繋がっていると知った彼は愕然とし、すぐさま穴を塞ぐよう手配すると言っていたのだから、もしかしたら出口はもうなくなっているかもしれない。

そうでなくても、この通路はやたらとアップダウンが激しく、距離が長くて足元だって悪いのだ。

母が転んで怪我をしないと限らない。

そう思うと、シオンはとてつもなく怖くなって、ただただ悲鳴のような大きな声で叫んだ。

「待って、待って、お願い——母上っ！！」

「シオン君……？」

滅多に聞かない「母上」との呼び名に、さすがに立ち止まったスミレが振り返って彼を見た。

少しずつ暗闇に慣れ始めたシオンの目が、きょとんとした母の顔を捉える。

シオンはほっと安堵したようにため息を吐き、自分を待つ彼女のもとに走りよって、とにかくその手を取ろうとした。

その時——

「——きゃっ……」

「——スミレちゃん!？」

短い悲鳴を残して、母の姿がシオンの目の前からこつ然と消え失せた。

さあつ……と、シオンの顔から血の気が引いた。

すぐそこにいたはずの、大切な大切なひとが、今はどこにもいない。

頭の中が真っ白になって、パニックに陥って叫び出しそうになっ

た次の瞬間、ガツと何かがシオンの二の腕を掴んだ。

「——っ……!？」

そして、悲鳴を上げる暇もなく強い力で引つ張られ、穴から引きずり出される。

暗闇に開いていた瞳孔に、一気に光が飛び込んできて、シオンは眩しさにぎゅっと目を瞑った。

「——シオン」

そんな彼の名を、よく知った低い美声が紡いだ。

弾かれたように顔を上げた先にいたのは、父ヴィオラントだった。

「……父上」

呆然と見上げるシオンの二の腕を掴んでいたのはヴィオラントであり、通路から彼を引きずり出したのも彼だった。

そして、その反対の腕には、ばつの悪そうな顔をした母スミレが収まっていて、シオンはほっとして身体の力を抜いた。

ヴィオラントは、そんな息子の小さな身体を片腕で軽々と抱き上げた。

「シオン、よく母の面倒をみたな。偉いぞ」

彼は、ぎゅっと首筋にしがみついていたきたシオンの、自分と同じ白銀の髪を優しく撫でて褒めた。

どうやら、後宮の側室の部屋から、騎士団宿舎の第一隊長の私室に繋がる隠し通路には、他にも横道に逸れるための隠し扉が設けられていたらしく、先代の皇帝として城のすべてを把握していたヴィオラントは、それを知っていたようだ。

現皇帝であり弟でもあるルドヴィークに、妻と息子の現状を聞いたのだろう。

ヴィオラントの背後には、ほっと安堵した様子の彼の姿が見えた。

「父上……折り入ってお話があります」

「うむ、聞こう」

「僕は、やっぱりまだまだいたいけなお子様なので、スミレちゃんのお守りは無理です」

「いや、そなたはよくやった。父は誇らしいぞ」

「っていつか、もうホントこりこりです」

それを聞いた母が、父の反対の腕から膨れっ面で睨んできた。

しかしシオンは、彼女が傷一つなく無事父の腕に戻ったことに心底安堵し、ようやく肩の荷が下りた気分だった。

「父上も、もうちょっとスミレちゃんに厳しくした方がいいんじゃない？ 言うことなんか、聞きやあしない」

「——と、息子が言っているが、どう思う？ スミレ」

「スミレは厳しく育てるより、褒めて育てる方が伸びるタイプです」

「——だそうだが？ シオン」

「甘やかすばかりが愛情じゃないと、思います」

「ふむ……意見が分かれたな」

そんなレイスウエイク大公爵家の家族会議を、完璧に巻き込まれた形のルドヴィークが戸惑った様子で傍観していた。

ヴィオラントは、しばしそれぞれの腕に抱いた愛妻と愛息の、お揃いのアメジストの瞳を眺めていたが、一つ大きいため息を吐くと、家長権限を発動してまともに入った。

「とにかく、今回はスミレに大事もなく、シオンもよくやってくれた——だから、二人とも。そなた達が私の言いつけを守らなかったことは、とやかく言うまい」

「……」

「……」

そう述べたレイスウエイク家当主の声は、どこまでも穏やかであったが、かすかにちくりと棘が混ざっていたのに気づき、スミレは居心地悪げに肩をすくめ、シオンは冷や汗を誤摩化して明後日の方向を向いた。

「しかし、おばあさまが寂しがっていらっしゃるから、シオンはしばらく皇太后陛下の部屋にいなさい」

「——げっ……」

それはつまり、大人しくスミレの分まで着せ替え人形になれと、

父はシオンに命じているのだ。

「スマレは——息子に心配をかけたことについて、少し話をしようか。——客室を、一室借り切つてな」

「えー……」

それはつまり、この後密室でお仕置きをするよと、ヴィオラントはスマレに宣言したのだ。

長兄の意図を正しく理解したらしい皇帝ルドヴィークは、顔を真っ赤にして俯いてしまった。

「じゃあ、気が済んだら迎えに来てね、父上」

「ああ」

「その時、僕が女の子になってしまつていても、どうか驚かないで」

「……健闘を祈る」

シオンは父の腕からびよこんと飛び降りると、初心な叔父の手を引いて、言い付け通り祖母の部屋に向かうことにした。

そんな息子の後ろ姿に、小さな妻を片腕に捕えた父は、思い出したように声をかけた。

「ところで、シオン。つかぬ事を尋ねるが、そなたは弟か妹、どちらが欲しい？」

「……」

ヴィオラントとスマレがこんな昼日中から、密室でこの後どんな話し合いをしようというのか——彼らの賢い一人息子は、ばっちり理解できているので、父の質問を突拍子もないと驚くこともなかった。

最近本気で、父母が第二子を望んでいることを、シオンはちゃんと知っているのだ。

シオンは、可愛い妹がいいなとも思ったが、今後も奔放な母に振り回されるだろうことを思うと、将来戦力となる手下が欲しいとも思つたので、

「どちらかというと、弟が欲しいです」

と、返事をした。

それに対し、父はすべてを心得たように、うむと頷いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0446w/>

最果てを求めて

2011年9月21日18時26分発行